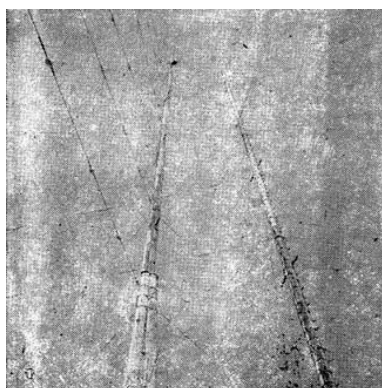


滅敵を電波に誓う——国際電気通信株式会社 福岡通信所・写真見学



第1図



第2図

「この電柱とあの電柱との間に張ってあるのが対ベルリン用のビーム空中線です。それから向うの入道雲の下に光って見えるビーム空中線は対南方占領地用です」と、案内にたたれた所長の関根平四郎氏が云われる。場所は国際電気通信株式会社福岡受信所の屋上である。

それではあのビーム空中線と90度をなす方向の遙か先に南方占領地があるのか。それではサイパンもあの方向にあるだろう。「太平洋の防波堤たらん」…と、死してなお皇土を護り抜こうという烈々たる愛国の至情を誌して散った幾多の英魂がおられるのだ。しかも忌々しい米鬼の奴等がそこにいるのかと思うと、一瞬ジーンと激しいものが身内を走る気がする。今にみると怒鳴りたい衝動にかられる。

見遥かす一面、複雑なビーム空中線群である。電柱は殆どすべて木柱で、組立柱と継柱とが使用されている。組立柱とは第1図の右の如くさな宛ら一本の柱の如くに見えるが実は長さの異った幾本かの素材を交互に組合せて作ったもの。継柱は第1図の左の如く所要の長さになるように木柱を継ぎ合せたものである。菱形のロンビック空中線もある。これは架設容易な上に広い周波数帯に亘り、かなり良好な指向特性を示すが、ビーム空中線には叶わない。

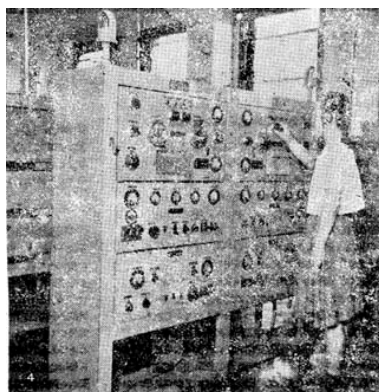
ここのビーム空中線は米洲向が多いというのは戦前同所は対米受信所として活躍していたからで開戦後これらは対南方用に使用しているという。電波の通路からみると、北米の反対側に南方占領地があるので、反射器の接続を逆にすれば対南方用として立派に更生するわけである。

ビーム空中線からの2線給電線はインピーダンス整合をしてから単心銅管により局舎内の空中線切換盤(第3図)へ接続される。この盤における水平方向の銅管群は空中線、垂直方向のは受信機の接続用でジャンパー線にて随意切換え使用するようになっている。

広い局舎内には様々な多数の受信機が整然と設置されており、その間には若い女子技術員が紅潮した双頬に流れる汗を拭いもやらず調整に監視に余念なく立ち働いている。この人達は同社が昭和17年以来養成していたもので、今ではべ



第3図



第4図

ルリンからの写真電信や放送電信、昭^{シンガポール}南とロンドンからの放送電信、その他各地から四六時中ひっきりなしに送られて来る電波を巧みに裁いて、男子技術員にさして負けをとらないという。

受信機(第4図)はスペース・ダイヴァシティ方式のもので、同社の狛江工場製作になる最新鋭のB型で、しかもこれは大変小型にできている。

この受信機の詳細は最近号で解説される筈になっている。

中央監視盤(第2図)では1名の男子技術員を長として、その下に3名の女子技術員が詰めている。ここでは受信信号が完全に記録器を働かし得るや否や、その信号が東京中央電信局へ誤まりなく移送されているかどうかを監視するのであって、重要通信が輻輳する今日、まこと瞬時の油断も許されない。常在戦場の気合はここにも強く要求されている。ここの所員達は南方各地からの電波を受ける度毎に、サイパン等で玉砕した将兵及び同胞のことを思い、必勝を撃滅を電波に固く誓うという。日本人たるもの誰か復讐を誓わざるやと記者も深く感じた。なお本見学には同社空中線課長・大野貫二氏の御高配を仰いだ。附記して深謝する。

(文と写真：通信院検閲済)〔寺沢生〕

PDF 化にあたって

本 PDF は、

『無線と実験』1944年8月号

を元に作成したものである。

PDF 化にあたって、旧漢字は新漢字に、仮名遣いは新仮名遣いに変更した。漢字の一部には振り仮名をつけた。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新(<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>)

に、

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館 (<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>)

に収録してある。参考にしてほしい。